

錢鍾書『困城』小論

—夢の終焉—

杉村安幾子

はじめに

一九九八年十二月十九日に亡くなった錢鍾書は、晩年は作家というよりも寧ろ学者としてその名を世に轟かしていたと言える。それは、中国社会科学院文学研究所に所属し、『談芸錄』や『管錐編』という大著を生み出したという功績に加え、中国は言うに及ばず外国の古典にも通じ、その博覧強記を具現するかのようにあまたの論文を著したゆえであろう。その錢鍾書の唯一の長編小説『困城』は、一九四六年『文芸復興』に連載され、翌年上海晨光出版公司から単行本として出版された。当時においては、「彼の『困城』は、既に我が家の“Favorite”^①になっている。」との同時代評を得るほど一大ブームとなり、「新儒林外史」とすら称された。その後、一旦は文学史上から彼の名、作品ともに姿を消すが、一九八〇年に入ってから再版され、更に追撃ちをかけるような九〇年代初頭のテレビドラマ化によって、再び『困城』ブームが中国全土を襲った。彼の小説や學術論著に関する論文・記事も堰を切ったように溢れ、「錢学」という言葉も生まれ、現代文学研究においても、錢鍾書の創作研究は一種の流行現象ともなり、現在に至るまで続いている。又、「中国近代文学の中で最も偉大な一冊^②」と評価する文学史

もある。

『困城』に関しては、中国で様々な作品分析が行なわれている。例えば、銭鍾書が文学創作上影響を受けたとされるイギリス文学との比較分析を行なったり、社会学的な著作としての解説などがあるが、この小説の主たるテーマが、タイトルに示される「困城」であるという見解では一致しているようである。銭鍾書の妻楊絳がこの作品のテーマを「城に囲まれている人は逃げ出したい。城の外の人は中に飛び込んで行きたい。結婚にしても、職業にしても、人生の願望は大抵このようなもの。」⁴と語っているのが、その典型である。「困城」という言葉に凝縮される人生の境地を、この作品は描き出しているのである。主人公の方鴻漸は、船の上に始まり、上海、故郷、内地の大学、再び上海というように、次々と生活の場を変える。彼は恋愛・就職・結婚に対し、何らかの期待と理想を抱きつつも、悉く失敗・挫折するのだが、結果、その場に居続けることができず、やむなく居住の地を移すのである。本稿ではこの方鴻漸に光を当て、彼の「夢」を鍵として、『困城』を見てみたい。彼は何をどのように理想とし、そしてどのようにそれらを失うかを、「夢」をキーワードとしてとらえ、作品を主人公の夢の破綻史として読んでみたい。ここで言う「夢」は、彼が実際に眠って見た夢と、彼の夢想（理想）の両方を含むこととする。眠っている間に見る夢は、潜在意識の表れであり、夢見る内容は、睡眠前の状況や心理的・身体的な状況に大きく影響される。夢は、古代より洋の東西を問わず、見る人の心理や体験を表象していると考えられてきた。単純に「夢イコール心理状態」と言い切ることはできないが、方鴻漸の見た夢は、彼の心象を探る手がかりになるのは間違いない。その上で、彼の夢・希望は、その破綻が小説の中で予め示されたものであるということにも論及したい。

一 恋愛の夢

『圀城』の冒頭では、留学生を乗せたフランスから上海へ向う船の上が描かれている。主人公方鴻漸は修めた学問の一つもないまま、四年間の「遊」学生生活を終え、偽の学位記を手にして、この船に乗っていた。方鴻漸の第一の夢は、「夢」とも呼び得ない恋愛遊戯、火遊びの期待だった。

船には若い女性が二人いた。フランスで博士号を取得した蘇小姐と、医学を修めた鮑小姐である。この鮑小姐は「ピンク色のチューブトップ、紺碧色のショートパンツを身に着けているだけで、白いサンダルからは紅く塗った爪が覗いていた。」「腰はすんなり細く、(中略)体つきはほっそり、後ろは重たげ、立った時には重くて腰がだるくなるほど。長い睫毛の下には、眠たげで、酔っているような、笑いを含んだ夢見ているような大きな眼。ふつくらとした上唇はまるで恋人に拗ねて口を尖らせているかのよう。」「暗いが黒いと言う訳ではない肌の色、豊満で刺激的な魅力」(第一章⁵)という、非常にセクシーな美人である。彼女は方鴻漸が金回りも悪くなく、人柄も良さそうなものを見て、長い船旅の無聊を慰め合う遊び相手に選んだ。方鴻漸は、学生時代に女性に慣れていなかったこともあり、鮑小姐の巧みな手際に見事に引掛かる。セクシーな美女に誘われてすっかり良い気分になる。しかし一方では、彼にしても鮑小姐を恋人とは見なさず、彼女はあくまで遊び相手、彼女から享受できるものは享受しておこうという態度であった。その結果、二人はいともあっさり関係を持つてしまった。以下は、その翌朝の描写である。

翌朝、方鴻漸が目覚めると、太陽は窓一杯に溢れ、時計は九時過ぎを指していた。彼は、昨夜の眠りの何と甘かったことか、充実していて夢も見なかった、眠りを「黒く甘き郷」と称するのも納得だと思った。(同前)

指摘するまでもないことではあるが、ここでの「黒くて甘い郷」は、鮑小姐との一夜につながるものであるばかりか、肌陰りのあるセクシーな鮑小姐をも想起させるものになっている。

しかし、方鴻漸の火遊びもここまでであった。二人のアバンチュールは、船のボーイに付け込まれたり、食事が不味かったりなどという事が重なり、急速に終わりを告げてしまう。鮑小姐は方鴻漸に冷淡になり、彼はプライドを傷付けられ、不面目に思うが、それは、自分が彼女を捨てたのではなく、自分が捨てられたのが気に障ったからなのであった。彼の「黒く甘き」夢は早々に終わる。彼らの関係は、船の上のみの瞬間的なものでしかなく、元々情熱をかけた恋愛に発展するまでもなかつたが、期待をした途端にそれが打ち砕かれるというのは、今後の方鴻漸の行動全てに及んでくる。

方鴻漸に再び甘い夢が訪れるのは、彼が上海に着いて、故郷も訪ね、舅（方鴻漸には既に故人となつてしまつた婚約者がいたが、婚約者の死後も、その家に世話になつてゐる。）の周頭取の家に落ち着いてからである。

ここ数日というもの、方鴻漸は日中は頭がぼーつとして眠たく、夜は却つて冴えていた。朝目覚めて、窓の外、樹上の鳥が鳴くのを聞くと、訳もなく嬉しく、目的がある訳でもないのに期待し、心はまるで重さがなくなり、軽くなつて昇天するかのようだった。しかし、この喜びは空虚なもので、子供が放つた風船のように、いくらも上らないうちに破裂してなくなつてしまひ、ただ茫然自失の訳のわからぬ感覚だけが残つた。彼はいても立つてもいられず、活動しようと思つたが、意気消沈して元気が出ない、柳絮が春風に漂う如く、身は軽いが、無力で、遠くには飛べないという感じであつた。（第三章）

春は心弾む季節であり、方鴻漸も何やら楽しい心持ちになるのだが、虚しくもなつてゐる。この描写こそ、方鴻漸の「恋愛の夢」の象徴以外の何物でもないのである。これについては、又後で述べる。

方鴻漸は退屈な日々を持て余し、船上で鮑小姐の去った後に親しくなった蘇小姐の家を訪ね、そこで蘇小姐の従妹である唐曉芙に出会う。唐曉芙は「美しく端正な丸顔で、二つの小さなえくぼがあった。天性の、普通の女性なら金と時間をかけ、紅や白粉で作りたいと思うような素晴らしい顔色」、「眼はそう大きくはなかったが、活き活きとして温かく」、「話したり笑ったりする時にこぼれ出る美しい歯」、「つまり唐小姐は近代文明社会の中の希少価値——一人の真正銘の少女だった。」（同前）方鴻漸は、聡明で快活なこの美少女を忽ち好きになってしまった。彼女に関しては、錢鍾書の妻楊絳が「唐曉芙は、明らかに作者が偏愛している人物で、作者は彼女を方鴻漸には嫁がせたくなかつたのである。」と冗談めかして書いているように、錢鍾書自身の理想のタイプでもあるようだ。方鴻漸は、唐小姐と蘇小姐の二人を食事に誘い、承諾の返事を貰った。

彼のその晩の睡眠は、ビーフンのように粘り気がなく、延びなかつた。彼の喜びは夢の中から顔を出し、彼の眠りを四度五度と破つた。目覚める度に、唐曉芙の顔が目の前にあるかのよう、彼女の声が耳に聞えるかのようであつた。彼は（中略）ウトウトと寝入りかけては、しばらくすると目を覚まし、この楽しさを眠りに埋没させてしまつたと思ひ、我慢して眠らずに、改めて又一通り昼の情景を温めた。（同前）

ここでの方鴻漸は、眠つて夢を見ている訳ではないものの、すっかり夢心地である。唐小姐と近付きになれたこと、彼女を食事に誘つて快諾してもらえたこと、その日に起こつたこと全てが楽しく嬉しく、興奮のあまりおちおち眠つていられないのである。これは、ただ好きな女の子のことを考えて幸福な気分浸っているだけでなく、唐小姐との恋愛の成就を夢見始めているのである。

方鴻漸は、彼と唐小姐との仲を嫉妬する蘇小姐に邪魔をされながらも、唐小姐と親しくなつていった。その頃、彼は国立三閩大学から教授として招聘するという通知を受け取つた。彼は何故その大学から自分に招聘状が来た

のわからなかったが、運が舞い込んできたと受け取り、これこそ唐小姐にプロポーズする好機だと勇む。ところが、いざ求婚した方鴻漸に対し、唐小姐は氷のように冷たく拒絶する。方鴻漸に振られ、いよいよ嫉妬に駆られた蘇小姐が唐小姐に、方鴻漸には婚約者がいるとか、鮑小姐の尻を追い回していたなどのことを話してしまっていたためであった。唐小姐は、本当は方鴻漸が嫌いではなく、彼が弁解してくれるのを望むが、手ひどく振られた方鴻漸は、言訳もせず去った。

その晩、鴻漸は日中のことを考え、ひとしきり顔が火照り、とても本当のことだとは信じられなかった。唐小姐に一つ一つすっぱ抜かれて、自分が下賤ならず者だと思つた。(同前)

唐小姐に失恋した晩、方鴻漸は眠れるはずがなかった。この場面は、前掲の「唐曉芙の顔が目の前にあるかのように云々」の記述と実に対照的である。一方は恋人のことを考え、嬉しさと楽しさで眠れない。もう一方は、恋人に振られ、その衝撃と傷心で眠れない。同じ「眠れない」でも、そこには天と地の差があつた。

こうして方鴻漸は、火遊びも本当の恋愛も破れてしまった。ここで先に挙げた春の眠りの描写が象徴的なもの、暗示的なものとして生きてくる。春の到来にウキウキし、心楽しいという状態は、彼の新たな恋の予感、そして恋愛当初の気分の比喩のようであつた。しかし、その実、「この喜びは空虚なもので、子供が放つた風船のように、いくらかも飛ばないうちに破裂してなくなつてしまひ、ただ茫然自失の訳のわからぬぼんやりとした感覚だけが残つた」(前掲)のである。つまり、方鴻漸の楽しい予感は、實際の所、空虚なものでしかなく、風船のように膨らんだ方鴻漸の「恋愛の夢」も、上昇しかけたと思いきや、破裂の憂き目を見たのである。そして、残つたのは茫然自失の感ばかりであつた。方鴻漸の「恋愛の夢」は、このように最初から行く末が暗示されていたのである。

二 就職の夢

唐小姐に失恋した方鴻漸は、上海を脱け出し、国立大学での就職を試みる。しかし、彼は本当には教師になどなりたくはない。唐小姐との恋愛が成就しそうだったからこそ、僻地の大学とは言え、教授の口を開運の印と思えたのだろう。恋愛が破綻してしまった今、上海から逃げ出したいばかりに大学へ向うが、教師になることは逆に不運なことのようにしか思えてならないのであった。方鴻漸は、共に三閩大学へ向う仲間である趙辛楣に、上海を発った船の上で次のように言う。

ここのところ、考えれば考えるほど味気なくなつて、今この船で上海に戻る勇気が自分がないことを恨んでいるんだ。僕は今度のことがあつてから、何月何日に結婚できるかわからないけど、でも君が本当に蘇さんと結婚したとしても、気持ちはこんなもんだつたと思うんだ。犬が水に映つた肉の骨の影を追つたために、くわえていた骨の方までなくしちゃつた！望んでいた恋人と結婚できても、きつとこの時の骨を食べ尽くしてしまつたようなものさ。逆に水際で二度と見えない影が惜しくなるんだ。(第五章)

方鴻漸は、すっかり仕事への意欲を薄れさせてしまつてゐる。イソップの寓話を例に挙げ、望ましい恋愛結婚ができて、犬が水に映つた影の骨の方を欲しがるように、今度は結婚前の状況や他の人との結婚を羨ましく思うようになると言つてゐるのである。そして、現在の自分の状況以外のことを羨ましく思おうとも、結果は水に映つた影のようなものでしかない、つまり空虚なのである、と。以前、方鴻漸が出席した食事の席で、「結婚とは、囲まれた城のようなもの。城の外の者は中に入りたいが、城内の者は逃げ出したい。」という話になつたのだが、方鴻漸はこの段になつてそれを思い出し、「困城」の境地とは何も結婚だけに及ばず、人生における諸事全般に及

ぶものではないかと感じ始めている。

鴻漸は輿の中で考えた。今日学校に着くが、どんな様子なのだろう。どうせ自分は過ぎた望みなんぞ持ちやしない。今さっきの旅籠の後ろのあの壊れた門が良い象徴だ。入り口に見えて、後ろには宮殿があるように人を引き入れるけれど、元々何もない、入るべき入り口もなければ、行くべき行き場もないのだ。(同前)

方鴻漸の口を通じて垣間見られるこうした人生に対する見解も、この小説のテーマたる「困城」状態に通じるものである。「元々何もない、入るべき入り口もなければ、行くべき行き場もない」、それが人生万事に及んでいると、方鴻漸は旅籠の門に人生の表徴を見ているのである。このように、「困城」のモチーフは、小説全編に渡って散りばめられている。

そして、彼らが辿り着いた国立三閩大学は、派閥が複雑に絡み合い、人間関係が混乱を極める、胡散臭いエセ学者の巣窟であった。方鴻漸はこうした怪しげな連中に愛想を尽かしながらも、自分を引き立ててくれる上司もいたため、奮起して名教授になる理想を抱いた。大学に到着する前の、意気消沈ぶりに比せば、随分積極的な姿勢になったと言えよう。しかし、彼の就職の夢の破綻の始まりは、親友趙辛楣の辞職からであった。行動をほぼ共にしてきた親友の辞職に打撃を受け、方鴻漸は仕事にも昇進にも意欲を失う。更に決定打となったのは、孫小姐との婚約である。孫小姐を狙っていた同僚に嫉妬され、その同僚の陰謀によつて共産主義思想の持ち主との濡れ衣を着せられ、方鴻漸は解職処分の憂き目を見たのであった。

こうして方鴻漸の就職の夢は破綻した。卑俗なインチキ学者の集う三閩大学で彼が得た物は、親友との別れ、うやむやの婚約、そしてお払い箱となった自分であったのだ。ここで、先に挙げた旅籠の描写が暗示的に生きてくる。「入り口に見えて、後ろには宮殿があるみたいに人を引き入れるが、元々何もない。入るべき入り口もなければ

ば、行くべき行き場もない」(前掲)。三閩大学も、「国立大学」の看板を掲げて、多くの学者が集う所ではあったが、詮ずる所、中身は空洞のようではしかなかったのだ。方鴻漸には、三閩大学が自分の「行くべき行き場」ではないことが、最初から示されていたのである。彼は、自分が恋愛の夢を抱いた時と同様「困城」状態にあることを本能的に悟りながらも、そこから脱け出すには至らなかつた。

三. 結婚の夢

方鴻漸と婚約した孫小姐は、名を孫柔嘉といい、一見世間知らずの少女のような女性である。大学を出たばかりで、助手として三閩大学に雇われていた。婚約する前は、方鴻漸を頼って甘えてばかりいたが、いざ婚約してしまうと、世間をよく知り、なかなか頑固でもあるという本来の性格が方鴻漸にも見えてきた。方鴻漸は最初は取り立ててどうとも思っていなかつたこの平凡な女性孫柔嘉を、大学へ向うまでの旅の間に意識するようになり、大学でのいざこざの中で、彼女に惹かれていったのである。そして、彼女と二人でいたところを同僚に見付かり、からかわれた時に、うやむやのうちに婚約したと言つてしまい、結果二人は本当に婚約したのであつた。婚約したことが同僚の嫉妬反感を買い、結果、方鴻漸の解雇につながり、方鴻漸と孫柔嘉は三閩大学を去つた。

一つの場所を離れるのは一回死ぬのに等しい。死ぬのが逃れられないことと知つていても、皆に自分が生き続けるのを望んでいてほしい。去つた後の毀誉褒貶は、死んだ後に与えられる荣誉と同様で知りたくても知る術はない。去るにせよ死ぬにせよ、蠟燭が消えた後に残るのは単なる悪臭だけというようになるのが怖かつた。(第八章)

あまりにも卑俗で、方鴻漸にとっては氣に食わない連中の集まりだつた三閩大学も、本当に去るとなると、引

き止めてもらいたくなる。方鴻漸は、自分の去った後の評判を気にかけているが、ここに「死ぬ」という言葉が登場したことは極めて興味深い。一つの場所を離れることが、即ち「死ぬ」に等しいということは、新たな場所へ向うことは、即ち「再生」なのではないだろうか。それまでいた場所を去り、人々の記憶の中からも消え去り、本人は別の場所で新たな「生」を得るということになるのではないだろうか。つまり、上海で唐小姐に振られた方鴻漸は、上海を離れることによって「死」に、三閩大学で新たな「生」を得た。しかし、又、三閩大学を離れ（Ⅱ死）、再生の場を求めて他の地に移るのである。

方鴻漸、孫柔嘉は香港で式を挙げ、互いの実家へ挨拶に行くが、堅苦しい儀式の多い、嫉妬ばかりの方家には二人とも辟易し、方鴻漸は自分を見下す柔嘉の伯母陸太太にもうんざりさせられた。この頃から二人の間に諍いが増えていく。二人は自分達の家を「悪口製造学校」と見なし、方家の両親、鴻漸の弟嫁、陸太太のことなど、何もかもが二人の喧嘩の種となった。

小さな田舎町にいた時は、彼は他人の軋轢が煩わしかったが、大都市に来たら、今度は又他人が冷淡なのが恨めしく、排斥される方がまだ自分を立ててくれていく証とすら思うのだった。つまり、ちつぽけな虫けらが、自分で勝手に自惚れて、自分を顕微鏡に置いて、拡大して見てくれる人がいればなあと望んでいるのだ。雑踏の中の孤独や、喧騒の中の味気無さは、この孤島に住む多くの人と同じように、彼の心をまるで頼る所のない孤島のようにしてしまった。（第九章）

田舎の三閩大学にいた時には、足の引つ張り合いが煩わしく、上海に戻ってきたら戻って来たで、他人の冷たい態度に自尊心が傷付けられる。方鴻漸はどこへ行っても、心楽しくなることはないのである。上海のような大都会だからこそ、彼は却って自分の孤独感が増し、他人との繋がりなさを感じていた。せめて家庭こそは回

變の場であつてほしいものだが、その家庭たるや、方鴻漸・孫柔嘉ともに身も心もすり減らすほどの口論の場ではなくなつていた。「雑踏の中の孤独」、「喧燥の中の味気無さ」、「頼る所のない孤島」といった表現には、妻や両親とすら通じ合うことのできない方鴻漸の心象が的確に示されている。方鴻漸は上海では新聞社に勤めていたが、自分の面倒を見てくれていた編集長の辞職に伴つて、自らも辞表を提出した。このことで妻と又ひとしきり言い争うが、その翌日、家に柔嘉を訪ねてきていた陸太太が自分の悪口を大声で言っているのを聞いた方鴻漸は、怒りのあまり外に飛び出した。

一軒のケーキ屋の前を通ると、ウィンドウの灯りが様々なケーキをピカピカと照らし出していた。ウィンドウの外にはぼろぼろな服装の老人が立つており、瞬きもせずウィンドウの中を見ていた。腕には籠をぶら下げ、そこには粗末な泥人形と蠟紙を張った風車が入っていた。鴻漸は、今の都会の子供達はこんな不細工な玩具などは欲しがりはずまい、精緻な外来の玩具がいっぱいあるのだから、この爺さんも可哀相に、商売があつたりだろうにと思つた。そして突然、自分は正に爺さんの籠の中の玩具のようだと思ひ當つた。この時節だというのに訪ねてくる人もないし、だから職探しもこんなに大変なんだ。(同前)

ここに登場する「泥人形」については、張明亮が次のような論を展開している。伝統文化と西洋文化が交錯する時代の流れの中で、その両者を半々に持つ鴻漸は、正に泥人形の比喩が正しい。鴻漸は嘘は付くが、良心は失つていない。しかし、西洋で四年間も生活したにも関わらず、完全に欧化する訳でもなく、結局時代の潮流に乗りきれない愚か者でしかない。欧化し続ける上海という籠の中の、孤独な泥人形なのである。この論に付け加える形になるが、方鴻漸は「泥人形」に、誰にも顧みられず、無能な自分の姿を重ね合わせもしているが、更に自分の夢の行方をも見ているのではないだろうか。狭い籠のような上海の中で仕事もうまく行かず、更に小さな籠であ

る家庭の中で妻と幸せに暮らそうとしてもうまく行かない。おそらく方鴻漸は最早過大な望みなど抱いておらず、孫柔嘉と仲良くやっていければそれには如くはないはずだが、そんな些細な望みですら泥で作られた物のように儂く脆いのである。この「泥人形」も方鴻漸の夢の表徴なのではあるまいか。

空腹を抱えて帰宅した方鴻漸は、柔嘉と激しい口論をした。柔嘉の婆やをも巻き込んで、互いに喚き散らした後、方鴻漸は又も家を飛び出して行った。戸外を再び迷うが、気が滅入り、空腹に疲労が重なり、仕方なく帰宅すると、家には柔嘉の姿はなかった。

(鴻漸は) 服のままベッドに倒れ込んだ。部屋がぐるぐる回るように感じられたので、しまった！断じて病気になんぞなれないぞ！と思った。明日は、あの支配人の所へ行つて、旅費の算段をまとめるんだ。旧正月は重慶で過ごせるぞ。心に再び希望が生じた。湿った柴に火は点けられないが、煙が出始めたようだ。何でもやってゆく方法はあるだろう。いつの間にか暗黒の闇が一つになって、すっかり彼をくるみ、灯火も消え尽くしてしまつた夜のように彼は眠りに就いた。最初、眠りは脆く、空腹感がピンセットのように彼の朦朧とした意識をつついて破ろうとし、彼は無意識にそれを阻んだ。鴻漸のそのピンセットの力は緩くなり、眠りも破れないほど堅くなった。夢も見ない、感覚もない、人生の最も原初の眠りは、同時に死の見本でもある。(同前)

方鴻漸の結婚の夢はこうして破綻した。そして同時に小説も幕を閉じた。方鴻漸は、結婚して悟つたのである。結婚とはまさに包囲された城砦であり、城の中を憧れはしたが、城の中は決して居心地の良い所ではないのだと。比翼の鳥、連理の枝とまではいかずとも、夫婦二人が仲良く暮らす、その程度の望みすら、囲まれた城の中では叶えられることはなかつたのである。

そして、方鴻漸と孫柔嘉のその後については、この小説においてはもう語られることはない。家を飛び出した方鴻漸が戻つて来た時、家には妻が既にいなかったことを考えれば、二人はもう二度とこの作品の中で会うことはないのだ。

方鴻漸が眠りに就いた時、「夢も見ない、感覚もない」状態であつたことは、結婚に対する理想が破れた上に、もう二度と再び夢を見ることはないということも意味している。方鴻漸は作品の最後で、夢も望みも完全に絶たれ、救いもないという究極に陥つてしまつたのである。更に「暗黒の闇」、「灯火も消え尽くしてしまつた夜」という表現は、奈落の底を彷彿とさせる。方鴻漸は、奈落の底でただ眠り続けるのである。

四. 夢の終わり

方鴻漸の「夢」を媒介に、『困城』を追つてきたが、こうして見てみると『困城』は明らかに方鴻漸の「夢」の破綻史である。方鴻漸は、恋愛に就職に結婚に理想や望みを抱きつつも、それは必ず破られてしまうのである。先にも挙げた通り、『困城』はフィールディングの『トム・ジョウンズ』に比較されてきた。『トム・ジョウンズ』の喜劇精神や諷刺精神に富んだ人物描写、皮肉を含んだ語調、銜学趣味等、確かに共通項が見られるが、両者の最も大きな相違は、作品のラストである。完全な所謂ハッピーエンドである『トム・ジョウンズ』に対し、『困城』は方鴻漸の「夢」に、絶望的なまでの完全な終止符が打たれる所で小説の幕は閉じる。そして、この相違こそが両者の決定的な違いなのである。喜劇の手法が用いられたゆえに、『困城』のラスト部分の悲劇的要素がより色濃く照らし出されたと見て良いだろう。方鴻漸は過大な望みを抱いた訳ではなく、それぞれの転機において、ごく普通の夢、理想を抱いたに過ぎない。夢を見、その夢が破れると、又次の夢を見、それを何度も繰り返して、と

うとう最後には夢をも見ない境地に陥ってしまった。恋愛・就職・結婚、その破綻の歴史も、彼が幸せを追い求めた結果なのである。

彼はまず寮を出て、便所へ行つた。寮の階上も階下もすっかり寝静まっております、彼の足音はそうした眠っている人々の夢を踏みつけているかのようで、鋏を打った革靴は重く響いて、その脆い夢のいくつかを踏み破っているに違いない。(第六章)

寝静まっていた寮の廊下を方鴻漸の靴音が響き、その音が他人の夢を踏み破っているだろうという、このさして重要とも思えぬ些細な描写も、以上のことを踏まえれば、何やら暗示的である。方鴻漸の靴音が踏み破った幾つもの夢というのは、或いは彼自身の夢ではなかったのか。彼の夢が破れたのは、無論彼だけの責任ではないが、自分の置かれた状況を悪化させこそすれ、一分も良い方向へ持つて行き得なかったのは、畢竟彼自身の非力ゆえである。恋愛・就職・結婚全てに失敗したのも、彼の薄弱な意志ゆえの結果であつた。つまり方鴻漸は、行く先々で自分の「脆い夢」を踏み破つて歩いていたのである。錢鍾書はこのようにして、方鴻漸の夢の結末を暗示させたのではないだろうか。李頻は、「方鴻漸にとって、『圜城』は単なる象徴であるだけでなく、予言でもある。この血のように赤い烙印を背負つて、彼は人生の円周上を一周又一周と走るのである。スタート地点はゴールだし、ゴールはスタート地点である。」と述べており、この論も、延いては方鴻漸が夢を踏み破つて回り続けるしかない円環、そして「囲まれた城」の中でもがき、あがき続ける方鴻漸の運命的な連環を述べているように思う。

今一つ注目すべきは、「死」のモチーフである。最後の場面の「(鴻漸は) 夢も見ず、感覚もない、人生の最も原初の眠りは、同時に死の見本でもある。」(前掲) という表現に、それが端的に表れている。方鴻漸は夢を抱き、それを追い続けたが、最後になって「夢」すら見ない。新たな夢を探す術もない。絶望と死の訪れである。ここ

での「死」は、三、で挙げた「二つの場所を離れるのは一回死ぬのに等しい」の「死」にも通じる。しかし、この例においては、新しい場所へ行くことは新たに生き始める、即ち「再生」のイメージがあるとも考えられたが、「夢も見ず、感覚もない」では再生の余地などない。つまり、「夢見ては破れ」の歴史は、「死んでは再生」の歴史でもあった訳だが、小説のラストで、夢も見ず眠り込んでしまい、次へ行くべき場所も示されなかった方鴻漸に示されるものは、絶望即ち「死」なのであった。

あの先祖伝来の古時計が、のんびりと時を打ち始めた。まるで、半日分の時間を溜めておいて、夜、人が寝静まるのを待つてから、運び出して一つ一つ丁寧に数を数えているように、「ポーン、ポーン、ポーン、ポーン、ポーン、ポーン」と六回鳴った。(同前)

こうして小説の終結部分で、時計が六時を告げる。この古時計は、実は役立たずで、五時間も遅れている。つまり、本当はこの時は十一時である。五時間前の本来の六時という時間は、「鴻漸は帰宅途中で、柔嘉に優しくしてやろうと思っており、二度と昨日のことで仲違いするなんてことはしないと、仲直りするつもりだった。同じ頃、柔嘉は家で、鴻漸が帰宅して夕食を取るのを待つており、彼が伯母さんと仲良くなって、彼女の工場で働くようになることを望んでいた」(同前) 時間であった。二人とも、今度こそうまくやろうと、これから先の生活を夢見ていたのである。しかし、二人が顔を合わせた途端にその夢は粉碎された。方鴻漸が疲弊しきって帰宅し、眠り込んでしまった後に、時計が二人の「夢」を孕んでいた「六時」を打つとは、何という皮肉であろうか。そして、方鴻漸はその時計の鳴る音に眼を覚ますことなく眠り続ける。小説の最後に、眠り続ける彼を嘲笑うかのようには鳴る時計は、方鴻漸の「夢」の終わりを告げる警鐘でもあり、そして又、二度と「再生」することのない「死」を迎えた方鴻漸のための皮肉な鎮魂歌でもあった。

むすび

一つの作品の読み方は一通りではなく、様々な解釈が可能であるように、『困城』も種々の読まれ方をしている。当時の社会や政治、更には普遍的な人生哲理に言い及ぶものも少なくない。本稿では、主人公方鴻漸の「夢」に絞って「困城」世界を追ってきた。『困城』という作品を時代性、社会性から完全に切り離して読むことが、果たしてどれほどの『困城』理解に繋がるかは甚だ心許ないが、暗示された自らの夢の行方を感じ取りつつも、それに抗う術もなく、逃れ得ない境地に陥る方鴻漸の姿は、当時の孤島に生きる人々、或いは当時の混沌とした中国社会に生きる人々の孤独や、果てもないと思われたであろう逼塞状況にも繋がって見えてくる。

『困城』は方鴻漸という一人の青年の物語であつたが、彼は「城に囲まれている人は逃げ出したい。城の外の人の中には飛び込んで行きたい。」という「困城」状態を、「夢見ては破れ」、「死んでは再生」という形で繰り返した。『困城』は、方鴻漸の夢の破綻史であつたのだ。そしてその結果、小説のラストで眠り込んだ彼が得た物は、まさに死のような眠りであり、彼の落ち込んでいた「困城」の螺旋の終焉としての「死」であつた。最終場面において、方鴻漸は「再生」のよすがもいまま、この期に及んでやっと「囲まれた城」から解放されたのかもしれない。

注

- (1) 趙景深『文壇憶旧』（北新書局1948）「錢鍾書与楊絳夫婦」
- (2) 夏志清『中国現代小説史』（劉紹銘編訳 友聯出版社有限公司1979）第十六章「錢鍾書」
- (3) 例えば、林海は『困城』与「Tom Jones」（『觀察』月刊1948年11月第5卷第14期）において、イギリスのHenry Fieldingの「Tom Jones」との比較分析を行ない、俞金吾『困城』与喜劇精神的興起（『復旦学報』1991年第3期）は、

『困城』は作者が喜劇精神を用いて、当時の社会構造を解剖した作品とし、その点からは社会学的な著作であるとしている。

- (4) 孫雄飛「錢鍾書、楊絳談『困城』改編」(解璽璋主編『困城内外——从小説到電視劇』世界知識出版社1991)
- (5) 錢鍾書『困城』(人民文学出版社1980)以後、『困城』の引用は全てこの版による。又、引用の末尾に章を附す。
- (6) 楊絳「記錢鍾書与『困城』」(『名作欣賞』1992年第2期)
- (7) 張明亮「孤独的泥娃娃——探索『困城』对“中西”文化的思考」(『錢鍾書研究』第三輯文化芸術出版社1992所収)に詳しい。
- (8) 李頻「从“困城”的符号意義看『困城』的主題思想」(『河南大学学报』1988年第5期)